

座談会

学生アシスタントから見た

環境情報学部の情報リテラシー教育

我妻 悠 大崎 英誉 木戸 ゆかり 坂本 溪 田中 奈々絵 松元 崇子 原 直美

環境情報学部の情報リテラシー教育のなかで大きな役割を果たしてきたのが、開学以来続いている学生アシスタント制度である。本学のアシスタント制度の特徴は、大学院生のみならず、低学年の学生も含めて学部生が数多く参加している点にあり、彼ら彼女らの存在なくしては、本学の情報リテラシー教育は成り立たない。今回の座談会では、そうしたアシスタント学生の具体的な経験から、本学の情報リテラシー教育がどのように見えているのかを語ってもらった。出席メンバーは、松元崇子さん（大学院環境情報学研究科博士前期課程 2005 年度修了）、大崎英誉さん（情報メディア学科4年）、木戸ゆかりさん（情報メディア学科4年）、坂本溪さん（情報メディア学科4年）、田中奈々絵さん（情報メディア学科4年）、そして、司会進行役もお願いした我妻悠さん（大学院環境情報学研究科博士前期課程2年）である。また、大学側からは、情報メディアセンター事務課職員の原直美さんに出席していただいた。

なお、本文中にある SA とは Student Assistant を指し、情報系授業のサポートを担当するアシスタント（厳密には、学部学生のアシスタントを SA、大学院生のアシスタントを TA (Teaching Assistant) と呼んでいるが、本稿では特に区別せず SA としている。）、また、ISA とは Information Study Assistant を指し、情報系施設内での様々な学生サポートを授業以外に提供するアシスタントである。



アシスタント座談会の様子

「アシスタントを志すきっかけ」

我妻：みんながアシスタントになろうと思ったきっかけは何だったの？自分から志願したのかな、それとも誰かに一緒にやろうと誘われたのかな？

坂本：ISA や SA をやってる先輩たちは、パソコンに詳しいだろうということで、そういう方たちと知り合いになりたかったし、先輩にいろいろ教えてもらいたいと思い、1年後期に ISA になりました。もともと自分も少し教えることができたので。

我妻：やっぱり先輩や人の繋がりはすごく大きいよね。

坂本：そうですね。1年前期に自分が履修した「情報リテラシー演習」で、磯辺さんが僕のクラスの SA をしていて、それで後期に入ってから、自分も一緒にアシスタントとなりました。

我妻：大崎君は？きっかけは何だったの？

大崎：SA はちょっと遅くて3年前期から、ISA は2年後期から始めました。

木戸：ずっと担当してる気がする(笑)

大崎：金銭的な問題と、バイトをするときに、学業を最優先としたかったのが、夜勤とか移動時間がかかるのはもったいないと思って。しかもアシスタントをしている時間は自分の復習にもなるのでこれが一番いいかなと。

我妻：そうだね。人に教えるってことはそれだけ自分も知っていると教えられないし、聞かれて分からないことは自分で勉強するしね。それって学生にとっては良いことだよ。松元さんはどうですか？

松元：所属研究室の後藤先生に「人に教えることは勉強

になるから、一緒にやってみない？」と誘われました。3年後期にプログラミングの授業でSAを担当したのが最初です。

我妻：田中さんは？

田中：1年前期の「情報リテラシー」で教えてくれた花立先生に推薦されました。後期からSAをやってみないかと、メールで誘われていたのですが、学校メールを転送設定してなかったのが、始めたのは2年前期からです。

我妻：僕はちょうどその授業のアシスタントをしていて、そういえば花立先生から「田中さんという学生がアシスタントに向いているんだけど、どうかな？」という話があったんだ(笑)。木戸さんは？

木戸：私は2年前期からSAをやっているのですが、空きコマでバイトが出来るなら良いなと思ったのと、教職課程を取っているのが教育実習でなにかの役にたつかもしいないかと思って始めました。

我妻：メディア学科創設で教職課程ができて、アシスタントもプッシュしていこうという動きがあったね。

「アシスタント制度が始まったころ」

我妻：初めのころを振り返ってみると、当初、アルバイト代はもっと少なかったんだよね…。大分時間はかかったけど、今は、ようやく改善されてきた。それも含めて、アシスタントの環境やメディアセンターの学習環境を良くしようという働きは、学生主体でやってきているんだ。たとえば、今、メディアセンターは22時まで開館しているけど、開学当初は18時までしか開いていなかったんだよ。当時のことは、第1期生の永岡先輩からいろいろ話を聞いていて、やっぱり18時までだと何も出来ない、と学生から意見が出てきた。当時は今みたいにほとんどの人がPCを持っているわけではなく、でもパソコンを使わなきゃ出来ない課題は結構出ているしどうしよう？っていう時に、職員の代わりにアシスタントが閉館作業をするから、開館時間を延ばせないかって話になったんだ。そうすると、学生だけで開館できるって事を、まずは大学に信用してもらわなくちゃならないよね。最初は試行として開館時間を20時までとして、アシスタントだけでも大丈夫だろう、ということになり、22時まで開館出来ることになったんだ。こういうことも含めて、みんなで作っていったというか、アシスタント同士協力して、意見を出し合って試行錯誤しながらここまで来た感じがする。

アシスタント業務そのものについても、最初何をしたら良いのか分からないゼロからのスタートだった。例えば、プリンタへの給紙はもともと事

務の方が行っていたんだけど、17時になると職員は帰ってしまうし、22時まで開館してるし、じゃあアシスタントがやろう、ってことになった。最初は学生の質問対応が基本だったけど、給紙など雑務的なこともやるようになったんだ。22時まで開館するときに一つ問題になったのが学生のゲーム利用。どうしても長く続く問題で、問題視するかしないかはその人それぞれで。事務と相談して、みんなが心地よくすごせるようにするにはどうしたらいいのかを一緒に考えて、一人ひとりが心がけようというマナー月間を設けることになったんだ。これは今でも続いているね。

永岡さんは、ゼロからつくり上げたという自負のある人で、トナー不足や給紙がされていないと、メーリングリストで「それも業務です。」なんて、みんなに注意をしてくれる先輩で、先輩から後輩に教えて行くというスタンスがあった。今はちょっとISAしてないから分からないけど…今はどんな感じなの？後輩と一緒にやっています。

坂本：堀口くんとかと、良く、こうしていったらいいんじゃないかといった話をするけど組織的にみんなで行っているかという、ちょっと分からないですね…

事務：ISA 連絡ノートを作成し、担当中に気づいたことがあるとそこに記入、時間内に対応できないことは次のISAに引き継ぎ、対応漏れがないようにしている。けど、永岡君の時代とはちょっと変わってきていると思う。

我妻：言葉で形容するのは難しいんだけど、アシスタントの気質というか、良くしていこうというこだわりがあって、堀口くんなんかは、無駄紙を少なくするために空きダンボールを利用して、授業資料のプリントなど再利用できる工夫をしてくれているよね。そういうのって、すごく良いことだから、後輩にもそういった活動を続けてもらいたいと思うんだよね。だいふ僕も上の世代になっちゃったので(笑)。

「ISA, SA の役割と学生への対応」

我妻：最近の現状を知りたいんだけど、「アシスタントがいたから出来ました！」という声を聞くとすごく嬉しかった。学生の多くがノートPCを持つようになったけど、それでも演習室を利用して課題をする学生は多いよね。その際にやっぱりISAがいると助かるのかな。今でも結構、質問は多い？

坂本：そうですね、多いですね。でもISAの教える対応範囲って、一番基礎的な科目「情報リテラシー演習」の範囲ってなっているじゃないですか。それ

でも「プログラミング」だったり、「CG 入門」だったり聞かれて、分かるところと分からないところがあったり…。結構いろいろな内容の質問が来ますね。

大崎：それはありますね。ISA をやっている時、SA で担当している「情報リテラシー」以外の講義の学生が質問に来て、それだったら教えることができるとか、そういうことがあります。

我妻：なんかさ、ISA ってスーパーマン的な存在だったりするよね。一応、対応する範囲は「情報リテラシー演習」の範囲ってなっているけど、授業のこと何でも聞かれるでしょ。質問してくる学生は、ISA を頼りにしているっていうのが分かるから、ちょっと難しい質問でも役に立てるなら、やってあげようという気になる。自分の力もつくしね。僕が知っている先輩 ISA も、みんなそうだった。でもちょっと引かなかったことが前にあって、「授業についての質問は授業でして下さい」と質問をつっぱねた ISA がいるって聞いた。あーなんかそういう ISA もいるのかなーと思って。

田中：あんまり専門に特化した質問だとやっぱり対応しきれないっていうのもあるかもしれない。癖のあるソフトだとやっぱり苦手な ISA もいるだろうし。

大崎：プレミア（映像のノンリニア編集ソフト。編集部注）、SAS（統計処理ソフト。編集部注）とか。

木戸：プレミアと SAS は難しい！

我妻：まあ得意不得意はあるからね。ただそのときの対応の仕方ってあると思う。分からないのは仕方ないんだよね。絶対誰でも苦手なことはあるから、でもその時に「分かりません！」と強く言うのではなく、他のアシスタントを紹介してあげたり、というのもアシスタントの業務なのかなと。

大崎：その辺は、明文化しなくてもやってるうちにみんな先輩のやっているのをまねて自然と対応できるようになりますね。特に分からないときの対応の仕方は先輩に倣うことが多いですね。

我妻：その辺の対応の仕方とか、自然と引き継がれて行くと良いよね。

我妻：SA のほうはどう？

田中：SA も、授業ではないときに、カフェで声をかけられてメディアセンターまで連行されたことがあります(笑)。教えてあげたら「ありがとうございます」と。

我妻：結構あるよね。授業時間外の繋がりというか、呼び出されたり。学内歩いていると「すみません!!」とか声をかけられる。

坂本：中演習室、大演習室に入ったとたん呼び止められたり。

木戸：授業終わった後に帰れなかったり。

我妻：それでも文句を言わずに SA を続けているのは、アシスタントになる人の人柄だと思う。そういう人だからこそ続けられるのかな。嫌な学生とかも正直いると思うけど、それでも対応してあげるのは優しいと思う。

「教員との連携、授業を作ること」

我妻：情報メディア学科が創設された時、PC を使う新規授業も増えたから一気に SA が増えたんだよね。初めての科目ばかりだから、アシスタントだけじゃなくて先生も多少なりとも不安があったと思うんだよね。だけどそこはいい意味で、僕らも先生の授業作りに協力できたら面白いだろうと捉えたんだ。特に「情報探索入門」の系統の授業はそうだと思う。SA がパソコンの使い方以外のところも教えたりするし。

田中：あの授業が一番、SA の技量が試されますね。同じ目線で話すのか、それとも教える目線でアドバイスするのか、とか。

我妻：先生と学生の中間になる役割って重要だよな。情報探索系もそうだけど、プログラム系の授業は最初、大変でしたよね？

松元：例えばどんな点で？

我妻：正直僕は苦労しました。「C++」の授業は先生と一緒に作っていこうということで、すごく面白くて良い経験になったんですけど、当時、実は僕は C 言語にそんなに詳しくなくて、SA をしながら一緒に勉強してた感じだったんです。だから、採点だったり、次の課題を先生と一緒に考えるときはちょっと苦労しました。「C++」は今年まで連続で担当しているんだけど、やっぱりだんだん授業の形もこなれてきたし、最初はソフトを使ってアプリケーションに特化したプログラムを作ろう、というので終わってしまったんだけど、もっとプログラム言語を作っていこうね、というような授業に変わってきた。その年々で変わってきているので、そのときに履修した学生には申し訳ないけど(笑)。今はそんな遷移がみられたのは良い経験になったと思う。そして、みんなはそんな変化しつつある時代に授業を受けてきたんだよね。

坂本：1つ上の学年の「C 言語」は、グラフを書いたりしていましたね。先輩が大変がっていましたね。

我妻：GUI（グラフィックユーザインタフェース。編集部注）開発をやったんだよね。ただあれはプログラムを写して終りになっちゃったから、プログラムを学んでいく、というところまでは行かなかったんだ。もっと考えて、ノートをもっととるように

していこう、と後藤先生と改善したんだよね。

木戸：今の1年生に口をすっぱくしていつていますね。
大崎：学生によっては教科書全てコピーしかねないですからね。

「遠隔授業のサポート業務」

我妻：教えるだけじゃなくて、遠隔授業の作業もあるよね。学生も増えて教室も増えて…今では大分システムが整備されたけど、最初は音が途切れたりクリアじゃなかったり、結構大変だったよね。

田中：遠隔操作でかなり授業時間が削られてしまうこともありましたね。

坂本：Webカンファレンスサーバでしたね。

木戸：遠隔先の教室ではバーチャル横井先生とか言っ(笑)。対面授業ではないから、マツタリしてしまう気配があったけど、私が「JAVA」を受けた時の先生は、今日は演習室1、今日はメディア演習室、という風に学生がだらけないように工夫していましたね。「あ、今日はリアル横井先生だ」というカンジで(笑)

我妻：先生の居る教室と居ない教室ではちょっと雰囲気違うよね。

田中：でも、遠隔先の教室は思ったよりはだらけてないかも。上手く動いていると思います。逆に普段先生が居ない教室に、いきなり先生が来ても学生はおなじ態度だけど、逆にずっと先生がいる教室のほうで、先生がいなくなったとたんすぐ帰る、という現象を見ました(笑)

我妻：学生も増えだし、一人一台のPCを使った授業をするとすると、やっぱり遠隔しかないんだよね。それを手伝えるSAの役割はすごく大きいよね。自分で言うのもなんだけど(笑)。

坂本：遠隔先の教室でも、やっぱりSAが教室の雰囲気を作っていくという感じがとてもしますね。締めるところはきちんとSAが締めたり。

木戸：先生が居ない分、アシスタントがピリッとしていないといけないという部分がやっぱりありますよね。

我妻：みんな遠隔やったことあるんだよね。

大崎：遠隔の作業はSAが把握しておかないと授業が滞ってしまいますね。特に非常勤の先生の授業は、SAがオペレーションを覚えておかないと、必ず授業時間を余分に使うことになってしまうから。

木戸：今年前期に遠隔授業のSAを初めてやりました。後期も遠隔のSAに入ったんですけど、一緒になった子が後輩だったから「はい、遠隔のやり方教えるから覚えておいて！」と教えておきました

た(笑)。

我妻：みんな今年で卒業だからね。これまでやってきたことを、後輩達にずっと続けていつて欲しいと思うよね。

田中：一回でも遠隔授業を担当したSAの先輩と関わらないと、次のSAが絶対育たないというのがあると思う。その辺をどうしていつたら良いのかというのはありますね。今年一つあったのが、遠隔のカメラを動かせるということをもみんな知らなかったり。情報の共有をしていくのが大切だと思ふ。

木戸：動かせるのは知ってるけど動かし方を知らないとか、パスワードを知らないとかね。

事務：そういうところは事務室でもバックアップしていかなければならない部分だと思う。今後の課題とさせていただきます。

我妻：学生のネットワークと、事務のネットワークが繋がると、すごく強力だよね。先生にもより安心して授業をしてもらえるとと思ふし。

「演習室利用のマナー」

我妻：演習室の利用マナーについては、どう思ふ？

田中：授業中の飲食とか…

大崎：学生だけでなく、先生の飲食が問題となったこともありましたね。ノドを潤すために、本来持ち込み禁止のペットボトルを持って来る先生がいたり。

田中：毎年ありますね。どうしても喋る職業なので仕方ないのかな、という気もしますが、学生の手前どうなのかなって気もしますね。

大崎：学生に対しては、先生がこぼして機器を汚損したら、先生がちゃんと弁償するんだ、と説明したことがあります(笑)

事務：教員が体調不良などでやむを得ず演習室内で飲食する場合は、受講生に断ってパソコンから離れた場所で行ってもらよう、お願いするようになりました。

木戸：禁止されているのに、最近ビニール傘など、教室への傘の持込もすごく増えていますね。

我妻：傘ね。ビニール傘だと盗難が多いからね。メディアセンター入口の傘立てで、鍵の無いところに置いておくと、取られてしまうことが多いよね。

事務：鍵付の傘たてが空いていても、普通の傘立てに置くのはなぜ？コインがなかったりするの？

坂本：お財布出すのが面倒、という意見を聞きますね。

木戸：鍵をキープする人もいるんですよ。マイ傘立てとして使っている人も。でも女の子の傘はな

くならないんですよね。ピンクだったり、水玉だったり特徴があるので。男の人の黒とか紺とかはなくなりやすいですよ(笑)

坂本：今年は、マナー悪いような気がしますね。気づいたら注意しますが、それでも注意する回数が多いと思う。

木戸：私も悪いと思います。

大崎：飲食で言うと、ペットボトルの演習室への持ち込みが当たり前になっている。

我妻：最初の頃は、みんなが注意する雰囲気というか、友だち同士でも「それだめだよ」と注意しあっていました。そのルールを知らない人には教えてあげて、みんなが心地よく利用していこうというのが自然とありましたね。飲食は、みんな外で休憩してたりしましたしね。今はCIS 談話室が折角あるのに、それでもPCをしながら飲んだり、食べたりしてるよね。僕の感覚ではすごくだらしないと感じる。やるときはやるべきだし、もしこぼしたらどうなるか、リスクを考えて欲しいから注意をするんだけど、分からないというか、大丈夫だよ、と思っている人が多い。授業が終わった後に食べかすや、ペットボトルなんかを机に置いていく人もいますが、悲しいよね。

大崎：ゴミがあったら捨てるに行くのですが、メディアセンター内には、不燃物のゴミ箱が無いから外まで持っていかなければならないのですよね。面倒ですが。

我妻：ISA やっていると、飲食問題は特に感じるのでは？

坂本：1, 2年生のときにISAを担当したときは、やっぱり見つけたら毎回注意しましたね。今はSAをやっている、飲食もそうだけど授業中に傘を持ってくる学生が非常に多いですね。私達が「リテラシー」を受けていた頃はそんなことなかったと思うのですが…

我妻：注意をしても「何で？」という顔されるよね。

木戸：去年、今年と「リテラシー」のSAをやっていますが、パッと見ただけでもペットボトルの本数が多いですね。カバンの中でなくて、手に持っていたり、机に置くのが当たり前というか。空でも置いてあったりしますよね。

大崎：自宅でのスタイルもそうなのかな、という気がしますよね。

我妻：お菓子やジュースを飲みながらパソコンをしているのかもね。でもさ、よくよく考えてみるとポテトチップスを触った手でキーボードやマウスを操作していると思うと気持ちよくないよね。演習室でもそうだとしたら次に使いたくないよ

ね。

木戸：演習室のキーボードで油っぽいのがたまにありますね(笑)。共用のパソコンだということをもうちよっと意識して欲しいなどは思いますよね。

我妻：マナー月間では、ゲーム対策もやってるけど、ゲーム絶対禁止の中演習室と、禁止だけど、2階の演習室は混雑時以外は黙認するとして、善後策というか対応策を考えて行こうと事務室と考えて始めたんだ。飲食対策もただ単に「だめですよ」というだけでは、今の学生には効果が無いだろうね。

木戸：家にPCがあるのが当たり前になってきてるし、前は課題は大学のパソコンで行うもので、パソコンは高価なものという感覚だったけど、そんな意識は薄れてきているのかも知れないと思います。

大崎：昔は高性能のパソコンやソフトは大学にしかなかったけど、今はPC自体の値段も安くなったり、ソフトもフリーのものが出回っているから、あまり貴重品の意識はなくなっていますね。

我妻：「壊したらどうしよう」と心配で、丁寧に扱っていた人が多かったけどね。

木戸：マウスのコード切れは今年はずごく多いですね。

大崎：マウスを持って、ぐるぐる回している人を見ました。目を疑いました。

木戸：大演習室で5台マウスが故障していて、そのうち4台でコードが切れていたんですよ。そのうちの3台はコードの中で切れていた状態だったけど、1台はぷつぷつり、ぷらんとした状態でした。

田中：大演習室は年期が入っているのと、あとPCをしまうときに引っ張られるから。

坂本：挟んでしまったりね。

木戸：キーボード立てのポールもバンバン抜けてしまってますね。

田中：「ヒマだから」っていじってる人多いです。

「授業中の学生対応」

我妻：…ヒマってどういうことなんだろう？そういう学生に限って今説明したばかりのことを、もう一回聞いてきたりしない？

大崎：授業を聞いていない学生に限って、授業後にやたらと質問に来たりしますね。

田中：一応、そこはつっこんでから教えるようにはしていますね。「さっき言っていましたよ」と。

木戸：遠くからでも質問してくる学生もいるけど、近くに寄ったときにだけ声をかけてくる学生っていませんか。分からなさそうだけど近

くにいないと絶対に質問してこない。

田中：回ってあげないとだめなんだよね。

坂本：画面をみて「出来た？」と声をかけてみると、ああやっぱり分からなかったんだ、と。

大崎：何週か授業が進んでから、最初から分からないといわれることもありましたね。分からない人は手を挙げてと言ったのに、自ら質問してこないパターンが一番困りますね。

田中：呼んでくれたら教えますよ、っていうのを明示するように動いていますね。誰かが質問すると、次々と質問が出てくることがあるので。

我妻：松元さんはどうやって対応していますか？

松元：同じような感じですね。自分で手を上げづらいだろうという学生には行って声をかけて、何が分からないのか聞いて対応します。

大崎：最初からつまりがちだな、という学生にはなるべくこちらから声をかけるようにして、こちらがきちんと教えていくと、向こうも信頼してくれて質問してくるようになりますね。聞き方が分かるようになってくるというか。

木戸：毎回教えているうちに親しくなってきた、何か分からない事があるときに目が合うと、目で訴えてくる、みたいな(笑)

大崎：質問の仕方が分かってくるということですかね。

「学生の質」

田中：それなら成長が見られるから良いのですが、今年は毎回同じところを最初から聞いてきて、分かったといいつつ繰り返し聞いてくる学生もいて気になります。

木戸：今年は多いね。

大崎：もう少し自分で上がっていきとすれば伸びるのにな、と思う学生はいます。

松元：私はその点については一週間に一度の授業だから、忘れるのは仕方ないだろうから、何回でも教えてあげるのは仕事のうちだと思いますね。前言ったじゃん、と言っても忘れてしまったものは仕方ないし。

我妻：授業は生もので、毎回同じものはないわけだから松元さんが言ったように、学生が分からないようだったら、アシスタントも臨機応変に対応するべきなんだろうね。

松元：あと、メモを取れと。おなじことを聞いてきたら、まずは先週書いたメモを見なさい、というようにしています。

木戸：たまに、SAは便利屋さんと思っている学生もいますね。もうちょっと調べてから聞いて下さい、といいたくなる学生がいますね。聞けば何でも

答えてくれると思っていたり。

坂本：答える前に、どこが分からないのか考えさせるのが良いのかなと思います。全部分からないと言わせないで、どこのどの辺りが分からないのかを自分が分かってからじゃないと、結局理解しないんじゃないかなと思うので、そういう風に聞いてますね。

「SAから見たSA」

我妻：SAからみたSAってどう思う？他のSAをみて、すごいなと思ったり、例えば、低学年のときについた先輩に影響を受けたりした経験はあるのかな。

坂本：やっぱり磯辺さんですかね。1年後期、コンピュータについての知識はあったけど大学のシステムについては良く分からなかったの、色々教えてもらいましたね。

大崎：枝松先輩が、口ではいろいろ言っていたけど、実際「情報リテラシー演習」のSAと一緒にやってみると、写真撮影などの手際が異様に良かったりして(笑)。無駄なくパスワードを配布して写真を取って、着席させるという。手際が良かったです。

木戸：最初、SAはただ質問にだけ答えていれば良いと思っていただけ、いざ「リテラシー演習」を担当してみると、パスワードを配布したり、課題チェックをしたり、結構いろいろやることあるんだな一と思いました。あるときは先生以上に場を仕切っていたりとか、時にはしゃしゃり出なくちゃならないのかなと思いましたね。

田中：今年初めて「リテラシー」を担当した先生のSAをしたのですが、SAの方は毎年恒例だから色々知っていて、ここまではSAが出来るのですが、これ以上は先生よりしく願いますというときに、先生が少しとまどったりというのがありましたね。境界が難しいというか…

我妻：やっぱりその先生は初めてで不安もあるだろうから、アシスタントの経験が活かせるときもあるよね。先生も、下準備でうまくいっても、実際の演習授業でちょっとしたトラブルが発生すると、とまどう場合もあるみたいで。

田中：「リテラシー」の授業を初めて受け持つ先生の場合、しかも今年からJAVAスクリプトが組み込まれたので、尚更プログラム言語なんて触ったことないということもあるし、OFFICE系もそこまであまり使っていないような場合は、その辺のサポートはむしろSAのほうが教えられるってということもあるかもしれない。でも今年は、新

たに担当された先生は勉強されてますね。他のベテランの先生の授業を見学して、ついでにSAとおなじようなサポートをしてくれたりして、野田先生とか。

木戸：野田先生はとっても熱心ですね。一人で中演でリテラシーの準備してたりするみたいですよ。

我妻：先生もすごく熱心にされているんだね。

松元：SAは2人一組で入ることが多いから、一人がフレンドリーに、一人がピシッと締めるというシステムが好きです(笑)。片方がまじめっぽいSAだったら、じゃあ私はちょっと遊んでみようかと。

大崎：叱り役と仲良くなる役って感じですかね。

木戸：2人だと自然とポジションが決まってきますよね(笑)。あの子は私には質問しないのに、もう一人には質問してたり(笑)。やっぱり学生から見ても親しみやすいSAとそうじゃないSAの好みがあるらしくて。

松元：女子は女子のSAに話しやすいとかね。

田中：それはありますね。呼ばれますもん。

木戸：前期リテラシー演習で担当したクラスの子が、後期のほかの授業にいと絶対声をかけてくるとかもありますね。

松元：まあでも、みなさんは、さっきも言ってたけど、教室外で声をかけられても、教えてあげるとか、あるじゃないですか。私は基本的にやらないですね。仲良くなったらやるかもしれないけど、自立してほしいから、あえて「今質問聞かないです」という雰囲気を漂わせています(笑)。

我妻：それは松元さんだからじゃないですか(笑)

松元：そうかもしれないですね(笑)。そういうのも必要じゃないかと思ひまして。

木戸：私は、携帯で呼び出されたことがありますよ。編入生でリテラシーを受けていて、周りに聞ける人がいなかったらしくて。JAVAスクリプトの3回目くらいでその子が分かっていないということに気づいて、実は初回から全く分からなかったらしくて…。いつでも早く連絡して！と携帯番号を交換したんですよ。毎週金曜になると「中演習室に来て下さい」と言われましたね。専属SAでした(笑)。

我妻：SA一人ひとりがそれぞれ頑張ってると思うと心強いね。

「後輩SAとの関係、教員との関係」

我妻：後輩のSAについて、何か思ったりする？

木戸：あまり人数いないんですよ…。

田中：SAで知っている後輩は、同レベルで会話しているので、特に教える事はなかったりしますね。

でも下の学年と組むことはあまりないかも。今年は特にアシスタントが固定メンバー化されていて、新しい後輩が入ってきたという印象が少ないですね。

木戸：去年からコマに人数が少なくて、見知った人が多いという感じですね。

我妻：本庄さん(情報メディアセンター事務課職員、編集部注)は担当を決めるときに、新人はベテランと組むように心がけてくれているけど、それにしても今年は新人が少ないってことかな。

木戸：新人は全て「探索」に行った、という話を聞いた気がする。

大崎：「リテラシー」にもちょこちょこいたんですけどね。

木戸：全部枝松さんと一緒だった気がする(笑)

田中：私は斎藤さんと一緒でしたね。

我妻：ちょっと今後が心配だよな。直接先輩と一緒に担当して「先輩がやってるから僕もやらなきゃ」という部分が多かれ少なかれあるじゃない。それは是非、引き継いでもらいたいと思うからね。

木戸：研究室の後輩は連れてきたりしましたが、純粋にSAで知り合った後輩っていうのはやっぱり少ないですね。

大崎：ISAは後輩多いんですけどね。最初は一緒に組んでいろいろ仕事を教えたりしましたね。

我妻：そうやって後輩に引き継いでいけばいいんだけど、プツッと切れてしまったら、折角10年つづいているのにもったいないよね。今後も続いていって欲しいと思うけど、僕らだけではどうしようも無いところもあって、事務の方との協力が重要だよな。

我妻：なんで少ないのかな、1、2年生のSAは…。

坂本：院生、4年生を中心にSAをやっていて、1、2、3年生はISAという風に、ちょっと分かれて来ちゃってますね。

松元：上がむしろ自重しないといけないんですよ。

事務：3、4年生になると授業が減ってくるから入りやすいというのもあるかもね。

松元：私は院生や高学年で時間的に融通がきくのなら、むしろ学部生が入れないところに入るようにするな。下の子に譲って行かないとだめなんじゃないかな。

大崎：ただ、「リテラシー演習」とか1週間に同じ授業がある科目を担当すると、後半になるにつれて、その週の経験値みたいなものができて、担当するには楽だったりしますね(笑)。

木戸：あれとこれとこれを担当するんだったら、同じ科目を持ちたいと。

我妻：アシスタントが多い学年，少ない学年ってあるんだよね。松元さんの学年が一番多かったんじゃないですかね。

松元：周りを見れば全員 SA，みたいな感じでしたね（笑）

坂本：今の4年も多いよね。

木戸：半期だけしか担当してない，って人もいるかもしれないけど。

我妻：僕の学年はすごく少なくて。僕は1年後期から入ってたけど，枝松くんも斎藤くんも SA 始めたの4年からだしね。それでも繋がっているんだから，その火は絶やさないで欲しいですね。

田中：あとあれですね，学生は先ず資料を探して，自分でみる，とうことを覚えてもらう事もお願いしたいですね。最近は先生が Web サイトを作ったり，e-Learning も整備されてきて，参照するものがいっぱいあるにもかかわらず，それを見ずにいきなり教えてという人が増えていて。一応「こういう資料もあるんだよ」と教えていくと，だんだん質問が減ってきて，そこを見るようになっていきますね。

我妻：大体 Web 検索すれば，ソフトの使い方ってのってるんだよね。

田中：質問してもらっていいのですが，資料がそこにあることも知っておいてね，と。

大崎：「リテラシー演習」ではどこを参照すればいいのかを何度も教えましたね。

木戸：「C 言語」でエラー読まないとかね。この部分に説明書いてあるでしょって（笑）

我妻：大分，みなさん言いたいことが溜まっていますね（笑）。第2回，3回と続けて開催されたいね。

2006年11月9日 情報メディアセンター内 CIS 談話室にて収録

謝辞

テープ起こしの大変な作業をすべて引き受けてくれた原直美さん（情報メディアセンター事務課職員）にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

（とりまとめ 土橋臣吾講師）

AGATSUMA Yu

武蔵工業大学大学院環境情報学研究科博士前期課程2006年度修了

OHSAKI Hidetaka

武蔵工業大学大学院環境情報学研究科博士前期課程1年生

KIDO Yukari

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科2006年度卒業生

SAKAMOTO Kei

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科2006年度卒業生

TANAKA Nanae

武蔵工業大学大学院環境情報学研究科博士前期課程1年生

MATSUMOTO Takako

武蔵工業大学大学院環境情報学研究科博士前期課程2005年度修了

HARA Naomi

武蔵工業大学横浜事務室情報メディアセンター事務課事務員